

現代の家庭における食形態について

千田真規子*・猪俣美知子**・上里千穂子*・斉藤 尚子***

(昭和61年9月30日受理)

On a Diet Form in a Present-Day Family

Makiko SENDA, Michiko INOMATA, Chihoko KOZATO and Naoko SAITO

(Received September 30, 1986)

はじめに

人間が生活していく上の一つの要素である〈食〉は、生命を維持するために欠くことのできないものであるが、他の動物と違い食品をそのまま食するのではなく、様々な手を加え(洗浄, 切断, 加熱, 調味), 器に盛り, 箸などを使用して作法に則って食する。風土, 生活様式, 宗教などに影響を受けて形成され, 食文化, 食習慣として継承されてきた。伝統的な食形態, 食習慣には精神的な意義が付与され, それを根拠とした躰が親から子どもへと継承され, 必然的に自己意識ないし共同意識を養うとともに, 自我の形成や社会化に大きく寄与したに相違ない。

ところが, 戦後の社会変貌とともに食形態を規定している居住・家族形態やそれに相応した「イエ」秩序, 意識に大きな変化があらわれた。食生活の変化により, 身体的な変化(体格の向上, 骨が弱い, 噛む力が弱いなど)は勿論, 精神的な面(非行少年の増加, 拒食症など)でも子どもに特に影響がみうけられる。物質的には満足できても精神的には満足できない状態といえる。

我々は, この憂慮すべき現実を鑑み, 「子どもの食生活と躰についての総合的研究」を続けてきたが, 家庭における食形態について, 下記の三地域の調査を行った。

I 調査方法

目的: 現代における子どもの食生活と躰について, その実態を把握するために「農村」「地方都市」「大都市」と考えられる各地域から一地区を選択して調

査を行ない, 比較検討する。

対象地域及び対象者:

- 農村—「埼玉県秩父郡小鹿野町」(以下O地区とする) 小鹿野幼稚園, 三田川幼稚園の4・5歳児の母親 219名
- 地方都市—「埼玉県秩父市」(以下C地区とする) 秩父幼稚園の3・4・5歳児の母親 122名
- 大都市—「東京都板橋区高島平近辺」(以下T地区とする) 大東文化大学附属青桐幼稚園, まるやま幼稚園の4・5歳児の母親 124名

地域の概況:

調査対象として選択した各地域の地勢, 歴史的概容, 人口・産業等の推移については, 生活科学研究所研究報告第9集(別冊)を参照

手続・方法:

各地域の幼稚園を通して依頼し, 園児の母親を対象に, 質問紙によるアンケート調査

時期:

昭和59年11月21日~11月30日(O・C地区)

昭和59年12月1日~12月10日(T地区)

質問項目:

1. 基本的属性

年齢, 学歴, 就業状況・職場, 家族構成, 住居

2. 食形態

1) 食作法—食事場所, 食卓, 座席, 食器, 箸箱・箱膳の使用, 食事時間・回数・状況, 用意とあと片づけ

2) 食法—調理時間, 献立, 調理の好き嫌い, 外食, 既製食品, 健康食品, 材料, 食事内容

3. 子どもの食行動

* 調理学第3研究室 ** 調理学第1研究室

*** 児童学科・保育科

所要時間、準備やあと片づけの手伝い、食事の際の注意、好き嫌い、箸の持ち方、躰の主体

4. 伝統的な食習慣

行事食とその意味、由来、神棚や仏壇、供物とその手伝い、食事まつわる故事

それぞれの具体的な質問項目については、生活科学研究所研究報告第9集(別冊)を参照

回収状況：

$$O地区 = \frac{219}{265} = 82.6\%$$

$$C地区 = \frac{123}{169} = 72.8\% \text{ (データ使用数は122部)}$$

$$T地区 = \frac{124}{170} = 72.9\%$$

集計：

質問項目毎の単純集計

II 結果と考察

本論文以下の以下の「表」について、実数は頻度(単位：人)を、()内の数字は%を示す。また「図」の中の数字は%を示す。

1. 基本的属性

1) 対象者：465人

O地区—219人 C地区—122人 T地区—124人

2) 性別：女性(園児の母親)

3) 平均年齢：33.4歳(父親—36.2歳)

O地区—33.2歳 C地区—33.0歳 T地区—34.7歳
(父親—36.0) (35.4) (38.0)

4) 学歴：

対象者の学歴は、表1に示されるように、中学校卒業者の割合が、O地区では1/3程度だが、都市になるにつれて減少、逆に高校卒業者が増加している。それ以上の学歴の者は、O地区16.5%、C地区36.8%、T地区41.1%であり、都市ほど高学歴となる傾向が見られた。

表1 学歴 単位：人(%)

	中学校	高等学校	専門学校	短期大学	大学	その他	無回答	計
O	74 (33.8)	85 (38.8)	17 (7.8)	12 (5.5)	3 (1.4)	4 (1.8)	24 (11.0)	219 (100.1)
C	17 (13.9)	59 (48.4)	17 (13.9)	16 (13.1)	12 (9.8)	0	1 (0.8)	122 (99.9)
T	3 (2.4)	66 (53.2)	20 (16.1)	23 (18.5)	8 (6.5)	0	4 (3.2)	124 (99.9)

O：小鹿野 C：秩父 T：高島平

5) 就業状況：

園児たちの母親の就業率は、図1から明らかなようにO地区が高く、C地区、T地区と低くなっている。職場についても、O地区では自宅外の割合が74%と高く、逆にT地区では自宅が仕事場である割合が高い。その理由として考えられることは、今回の調査対象が保育所ではなく幼稚園であること。またT地区では核家族が90%以上となっており、母親以外の養育者がいないなどということが上げられる。ただし、O地区でもフルタイムとパートタイムがほぼ同率で、農業を「仕事」としている母親は非常に少ない。

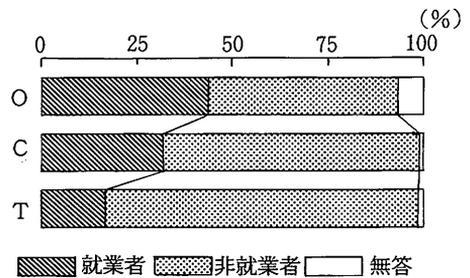


図1 母親の就業状況

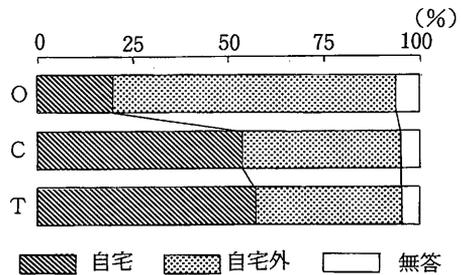


図2 職場について

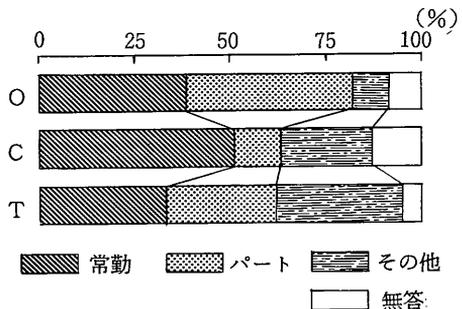


図3 勤務状況について

表2 職業

	農 業	専 門 ・ 技 術 職	事 務 職	販 売 職	製 造 工 程 職	単 純 労 働	サ ー ビ ス 職	管 理 職	無 回 答	計
O	3 (3.1)	10 (10.4)	22 (22.9)	14 (14.6)	0	35 (36.5)	3 (3.1)	0	9 (9.4)	96 (100.0)
C	0	8 (20.5)	6 (15.4)	9 (23.1)	2 (5.1)	1 (2.6)	11 (28.2)	0	2 (5.1)	39 (100.0)
T	0	4 (19.0)	5 (23.8)	5 (23.8)	0	0	4 (19.0)	1 (4.8)	2 (9.5)	21 (99.9)

6) 家族構成：

O地区とC地区では、核家族と拡大家族がほぼ半数ずつとなっているが、T地区では92.7%が核家族であり、大きな差がみられる。家族の人数からみると、5人以上の家族がO地区では64.4%、C地区では56.6%、T地区になると20.1%と都市になるほど減少している。またT地区の最も多人数の家族は7人で、わずかに1.6%だが、O地区になると7人～9人の家族が22%を占めている。

子どもの人数は、どの地区も共通して2人の場合が最も多いが、特にT地区では6割以上が2人となっている。さらに、ひとりっ子の割合も都市になるほど増えており、T地区においては3人きょうだいよりもひとりっ子の家庭の方が多くなっている。これらのことは、住居との関係も深いと推察される。

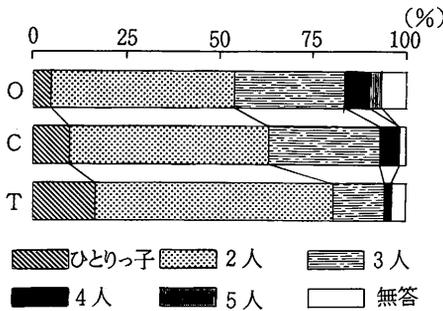


図4 子どもの人数

7) 住居：

住居については、一戸建がO地区で75.8%、C地区が77%と2つの地区では高率を占めているが、T地区では18.5%と2割弱となっている。T地区の2つの幼稚園は、高島平団地に非常に近いので、団地に住む人が51.6%と多い。またマンションも20.2%を占め、集合住宅の少ないO、C地区と比べて大きな違いがみられる。部屋数も4室までがO地区25.5%、C地区33.8%に対し、T地区では75%を占めており、5室以上の一戸建に住む人がO、

C地区に多いことがわかる。

2. 食形態

1) 食事の場と食作法

食作法の場として普段食事する部屋が「決まっている」というのは、三地区でO地区94.9%、C地区98.4%、T地区96.0%とほぼ95%以上の回答で圧倒的に多い。

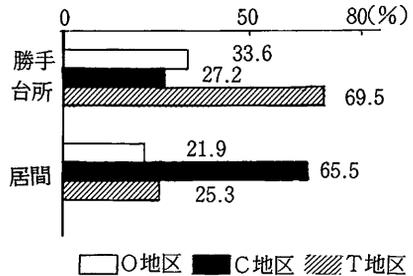


図5 決まっている場合の場所

図5 (図6, 8, 9以外の図はその他、無答を省略した。)より、「決まっている場合」その場所については、三地区の違いがみられ、T地区は「勝手・台所」が他の地区より2～3倍多く、C地区は「居間」が他の地区より3倍多い。O地区は「勝手・台所」がやや多いという結果になった。「その他」の中には、「朝は台所・夕は居間」、「夏は台所のテーブル」、「冬はこたつがあるため居間」というのが含まれていた。また、「決まっていない」場合の理由としては、「父親の帰りが早いときは居間で、遅いときはテーブル」という回答があげられた。次に食卓は何れを使用しているかという点、

図6より、「座卓」がO・C地区がT地区の2倍も多いが、「テーブル」使用は、T地区が多く、農村、地方都市、都市の生活の違いが見られる。「その他」の中には、夏はテーブル、冬はこたつという季節による違いがみられた。ではすわる位置はどうかという点、上座、下座という家族の座席が伝統的な「イエ」の制度の上に成り立っているであろうという仮説のもとで、家族の座席をみると、「決まっている」という回答が圧倒的に多い。C、T、O地区の順であるが、上座、下座の意味は薄いようである。「決まっている」場合の理由についてみると表3より、父親の場合は、「なんとなく」の回答が多く、「上座を基準に」が次に多い。母親の場合は、「準備や片づけに便利」が圧倒的に多く、「上座を基準に」はO地区が1.6%あるのみである。祖父の場合は、「上座を基準に」はC・O地区に多い。次に多いのは「無答」の

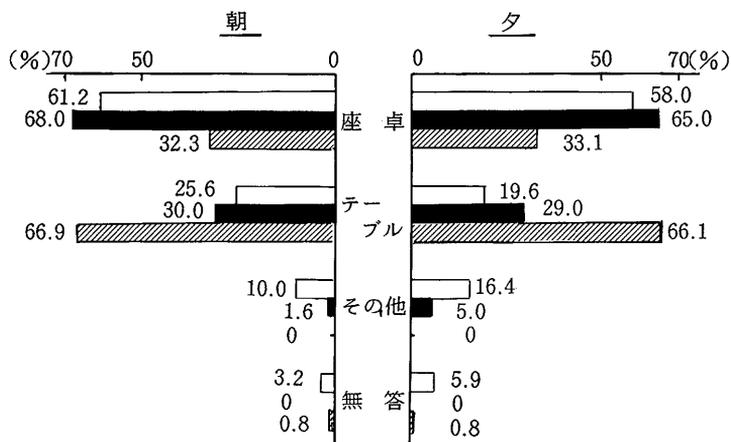


図6 食卓の種類

表3 座席の決まっただいたい理由

		準備や片づけ	準備や片づけ	子世話	上座を基準	なんとなく	テレビがよ	その他	無回答	計
父	O	2 (1.1)	0	19 (10.2)	32 (17.2)	70 (37.6)	26 (14.0)	8 (4.3)	29 (15.6)	186 (100.0)
	C	1 (0.8)	0	9 (7.6)	31 (26.0)	38 (31.9)	18 (15.1)	5 (4.2)	17 (14.3)	119 (99.9)
	T	1 (0.8)	0	16 (13.5)	27 (22.9)	48 (40.6)	14 (11.9)	8 (6.8)	4 (3.4)	118 (99.9)
	計	4 (0.9)	0	44 (10.4)	90 (21.3)	156 (36.9)	58 (13.7)	21 (5.0)	50 (11.8)	423 (100.0)
母	O	117 (62.9)	5 (2.7)	23 (12.4)	3 (1.6)	16 (8.6)	10 (5.4)	0	12 (6.5)	186 (100.0)
	C	86 (72.3)	3 (2.5)	14 (11.8)	0	4 (3.4)	0	3 (2.5)	9 (7.6)	119 (100.0)
	T	90 (76.9)	3 (2.6)	16 (13.7)	0	6 (5.1)	0	1 (0.9)	1 (0.9)	117 (100.1)
	計	293 (69.4)	11 (2.6)	53 (12.6)	3 (0.7)	26 (6.2)	10 (2.4)	4 (0.9)	22 (5.2)	422 (100.0)
祖父	O	5 (2.7)	0	2 (1.1)	21 (11.3)	29 (15.6)	10 (5.4)	0	119 (63.9)	186 (100.0)
	C	1 (1.2)	0	2 (2.4)	11 (13.1)	5 (6.0)	6 (7.1)	3 (3.6)	56 (66.7)	84 (100.0)
	T	1 (2.2)	1 (2.2)	0	1 (2.2)	1 (2.2)	1 (2.2)	0	40 (88.9)	45 (99.9)
	計	7 (2.2)	1 (0.3)	4 (1.3)	33 (10.5)	35 (11.1)	17 (5.4)	3 (0.95)	215 (68.3)	315 (100.0)
祖母	O	15 (8.1)	8 (4.3)	4 (2.2)	8 (4.3)	32 (17.2)	12 (6.5)	2 (1.1)	105 (56.5)	186 (100.2)
	C	10 (10.6)	10 (10.6)	6 (6.4)	1 (1.1)	16 (17.0)	2 (2.1)	3 (3.2)	46 (48.9)	94 (99.9)
	T	1 (2.5)	1 (2.5)	0	0	2 (5.0)	0	0	36 (90.0)	40 (100.0)
	計	26 (8.1)	19 (5.9)	10 (3.1)	9 (2.8)	50 (15.6)	14 (4.4)	5 (1.6)	187 (58.4)	320 (99.9)
子ども	O	36 (4.8)	24 (3.2)	15 (2.0)	2 (0.3)	156 (20.7)	60 (8.0)	14 (1.9)	446 (59.2)	753 (100.1)
	C	3 (0.9)	9 (2.7)	17 (5.1)	3 (0.9)	79 (23.5)	38 (11.3)	16 (4.8)	171 (50.9)	336 (100.1)
	T	2 (0.8)	8 (3.3)	19 (7.8)	10 (4.1)	91 (37.3)	16 (6.6)	23 (9.4)	75 (30.7)	244 (100.0)
	計	41 (3.1)	41 (3.1)	51 (3.8)	15 (1.1)	326 (24.5)	114 (8.6)	53 (4.0)	692 (51.9)	1333 (100.1)

占める割合である。これは祖母についても言えることである。「なんとなく」の回答も祖母全体の中では多くみられる。子どもの場合は、「なんとなく」が全体の20~40%ある。また「無答」の回答も最も多い。以上のことから言えることは、父親の場合「なんとなく」という漠然とした回答が多い割に「上座を基準に」が少ないことである。上座とは床の間のある所、勝手口より遠い所、テレビが正面から見られる所なのか、この場合はっきりせず、上座、下座という言葉すら家屋の変化により失われたようである。都市化している地区程、それが希薄である。母親の場合「準備や片づけに便利」、つまり勝手や台所に近い位置が母親の座席に位置され、広義で下座に入るのかもしれない。先の「食事する場所は決まっている場合どこですか」という問いに対し、勝手、台所、居間の順に多く、都市化していくに従ってその傾向が大きい。例えば、T地区をとってみると、食事する場所は勝手、台所が他より多く、67.5%で、座席は、「準備や片づけに便利」な席が最も多いのである。「居間」よりも「勝手、台所」が多いということは、「イエ」制度の反映より、食事の「用意やあと片づけ」等の利便性が都市化地域程、重視されている。祖父母の場合は「無答」の回答が他の家族に比べて最も多い。このことと家族構成を比較してみると、核家族、拡大家族の割合とやや正の相関がみられる。つまり「無答」の多いT地区は90%以上が核家族で「両親に子どもが2人」という類型が半数以上、C地区は、核家族と拡大家族がほぼ半数ずつの割合を示し、2軒に1軒は拡大家族である。O地区は、拡大家族が48.9%と半数を占めている状況である。子ど

の場合「なんとなく」と「無答」が多くみられ、「なんとなく」はT, C, O地区の順で多く、「無答」はO, C, Tの順で、C地区を除くと、逆の相関がみられ、いずれにしても漠然とした回答である。この中には、父親、母親、祖父母のそばであったり、子どもの好きな場所に座らせるとかの理由も含まれている。また、「テレビがよく見える」という座席は、父親に多く、次いで子どもの順になっており、母親はO地区の5.4%を除けば0%である。そして、この座席の決め方は、食事の用意とあと片づけの役割とも交差するので、家族の役割をみると、「用意、あと片づけ」とともに「私の役割」（母親一回答者）で圧倒的に多い。「主人の役割」は、三地区ともに0%である。「祖父母の役割」は核家族の多いT地区が0%、他は2～5%である。以上、食事の場所、食卓、座席そして用意・あと片づけという食作法について認められる傾向は、伝統的な「イエ」秩序や居住形態の変化、他方では基本的な共同体のわずかな変化、特に都市（T地区）においては、主人の仕事との関係が大きな影響を与えていること、核家族のため祖父母の同居がみられないことなどからも、次第に食作法にも、食事の利便性が優位していると考えられるようである。

2) 食器

中国や朝鮮半島では、取り箸がなく、直箸がマナーとされ、親愛の情を表わすマナーとされている。わが国ではこれと反対に、直箸がきらわれ、取り箸を使って盛り分ける。この取り箸も、神事儀礼のなかでけがれを忌避する神道の清浄観から誕生したといわれている。そこで家族が毎日使用する食器（箸、箸箱、お茶わん、お椀等）は各々に「決まっていますか」という問いで、「決まっています」との回答が圧倒的に多く、T地区98.4%、C地区94.3%、O地区87.2%であった。では「決まっています」理由は何かというところ、

図7より三地区ともに1位「お互いの存在を確認するため」、2位「習慣だから」、3位「大きさによって」、4位「衛生面を考慮して」の順であり、また、「決まっていない」場合も僅かにみられたので、その理由をあげてみると「大人と子どもの違いだけ」、「みな同じ柄なので」という理由で、三地区とも類似した回答であった。

箸箱は「めいめい使っていない」との回答で、C地区95.1%、T地区82.5%、O地区82.2%とわずかに違いがみられる程度で、恐らく三地区とも、「箸立て」なるものを使用し、家族全員一緒に収めているものと思われる。

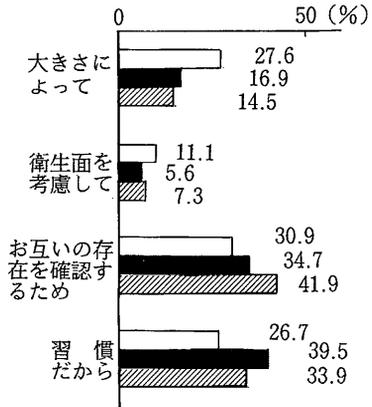


図7 食器の決まっている理由

がしかし、個人用の箸が使用されている。また、最近では殆ど姿を消した箱膳については「使ったことがない」が圧倒的に多かった。C地区84.4%、T地区82.3%、O地区79.1%である。

日本人の食習慣、食文化あるいは食事のスタイルは、他人の食べものには手をつけず、他人のお箸や食器は使わない、あるいは食べものはめいめいの膳に盛るといった日本独特の伝統的な「食器個人主義」の文化は、けがれを忌避し、清浄を貴ぶ神道的な清浄観から生まれたものといえよう。

3) 食事回数・時間・状況

現代に至っては、食事の回数は朝、昼、夕の3回食が普通である。比較的家族の揃っている朝と夕を取り上げ食事開始時刻と食事に要する時間を食事状況と合せて調査した結果、「食事の際、大抵家族全員そろっている」との回答は、O地区で（朝59.4%、夕79.4%）、C地区（朝52.5%、夕69.7%）、T地区（朝51.6%、夕27.4%）と朝食は三地区ともに家族そろって食事をしているが50%以上であるのに対し、夕食は、T地区が他より少なく27.4%と、家族そろっていない状態が目立つようである。その理由については、図8、図9に示した。

図より、全員そろっていない場合、朝、夕とも「主人の勤務の関係で」、「主人不在の時」が多く、T地区に著しく見られる。次に朝食のみに「子どもの通学、通園」のため「子どもだけ」という場合、「私の勤務」（回答者）の関係で「私が不在」も朝食にみられ、夕食にはなかった。「私の勤務」の場合、「私が不在」はO, C, T地区の順になっており、この理由と、就業状況は似ており、O地区43.8%、C地区32.0%、T地区16.9%という就業

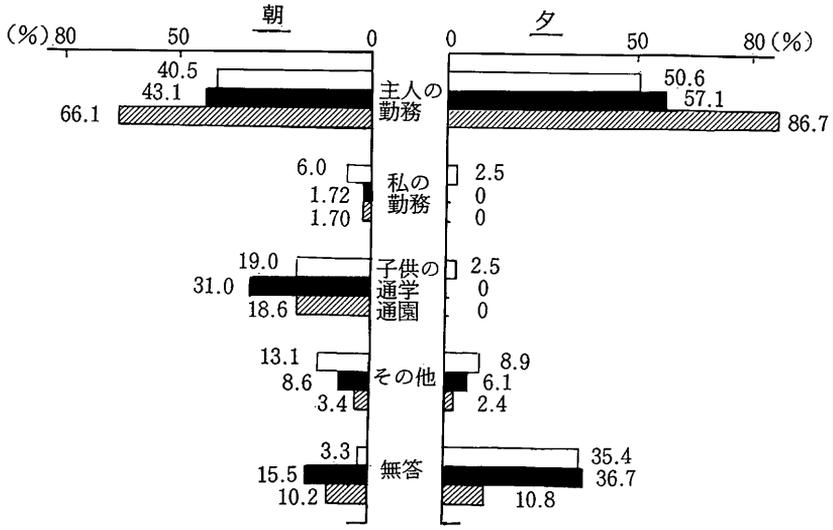


図8 いいえの場合 ~の関係で

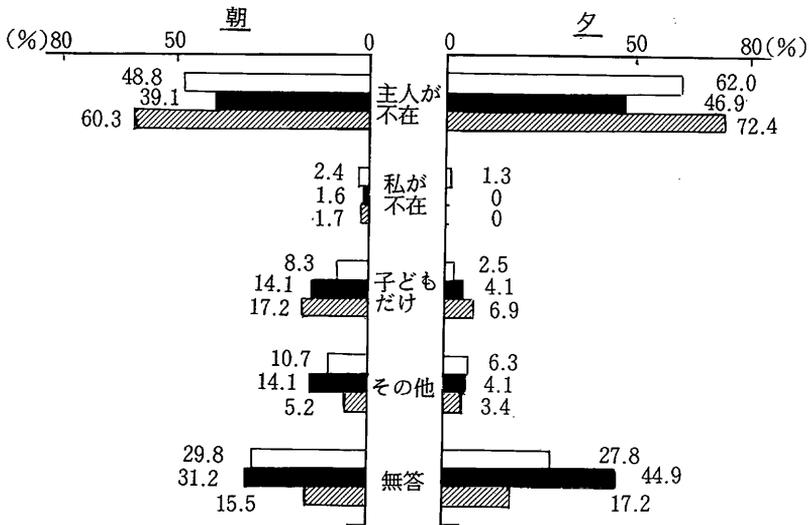


図9 いいえの場合 ~の時間が長い

率であり、「いいえ」の理由と就業状況とは正の相関がみられた。両親の就業状況が「朝・夕」の食事において影響をおよぼし、父親不在での食事が特にT地区に目立つようである。次に就業と食事時間の関係は図10より、食事開始時刻の朝は、O地区が「7時」、C・T地区が「7時30分」に多く、夕は、「6時30分」と「7時」に三地区ともに集中しており、若干、「6時30分」が多い。図11より、食事に要する時間は朝で「15分～30分」に集中しているが、T地区が少なく、夕は「30分～60分」に集中し、T地区が多く、「15分～30分」要している地区は

O地区が多い。食事時間と食事状況から言える事は、朝食は都市に比べて農村地区の方が早い時刻であり、食事に要する時間が短いことがうかがえる。このことは、家業、勤務に従事する都合によって左右されてきたものと概況され、それには協同体を基盤とする生活様式の規定性がうかがわれるのである。

3. 食法

1) 調理と調理時間

調理することについては図12に示す。調理することが

食形態

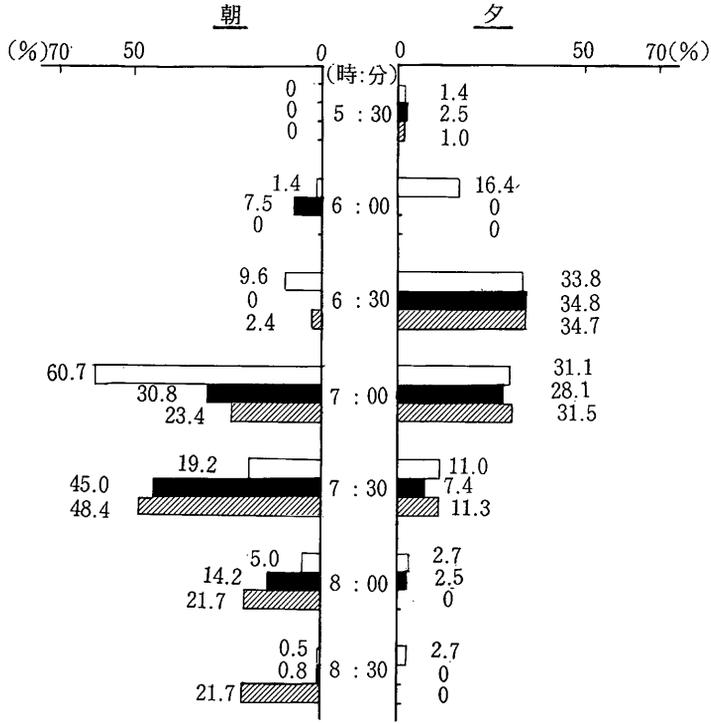


図10 食事開始時刻

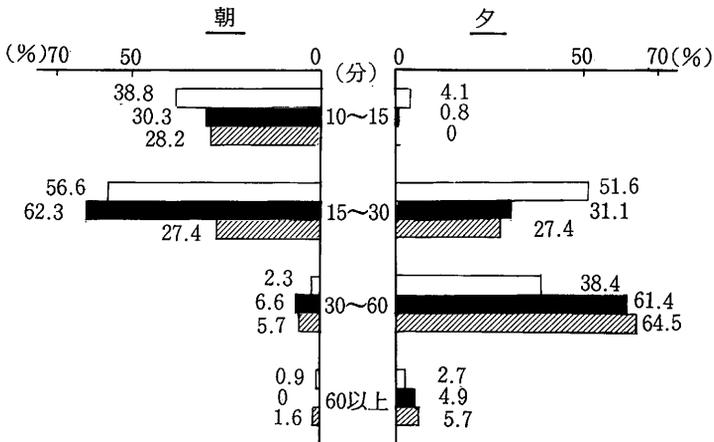


図11 食事に要する時間

「だいすき、すきなほう」の双方を合計した結果、C地区が55.8%で最も高く、ついでT地区の46.8%、O地区の43.4%と続き三地区の較差は10%程度となり、顕著な差は認めがたかった。また、「どちらともいえない」が三地区ともに40%前後とかなりの値を示し、これに回答した人の事情がどのような点に起因しているのかについて着目する必要がある。さらに、調理が「あまりすきでは

ない、きれい」についてはC地区で10%以下であるが、T地区では11~13%となった。

前述の結果が示すようにC地区では過半数以上が料理を愛好するタイプとも言える。一方、他の地区に比べ専業主婦が80%を占めるT地区、さらには拡大家族で主婦の就業者が多いO地区で「どちらともいえない、あまりすきではない」との回答が過半数以上を占め、義務感で

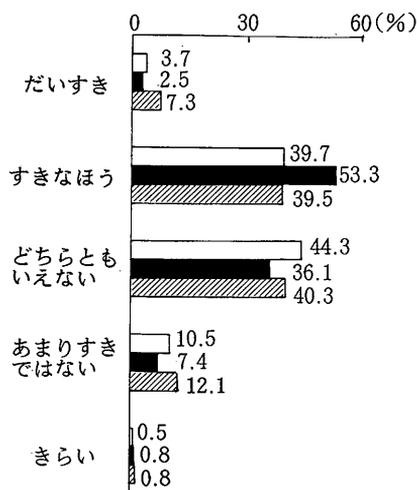


図12 調理すること

2) 外的要因が三地区に及ぼす影響

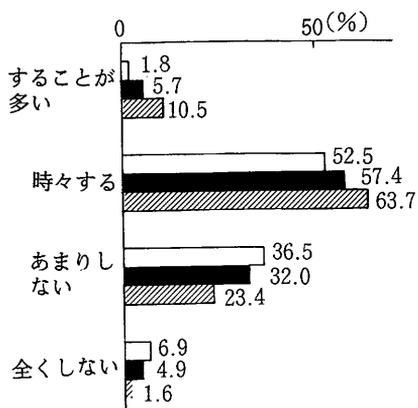


図14 外食について

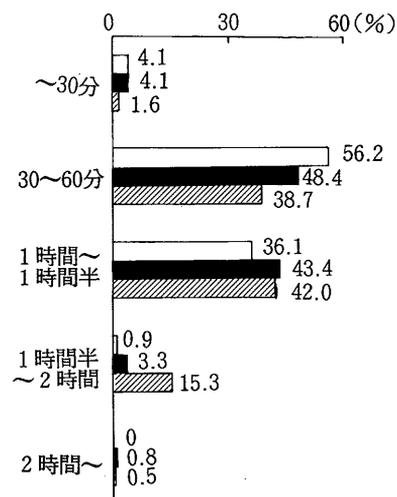


図13 夕食の調理時間について

調理を行っている一面もうかがえる。

次に調理の関連項目として夕食の調理時間について図13に示す。O・C地区では調理に50%程度で30~60分を費やしている。また60~90分をかけている家庭はC・T地区で40%以上、O地区では40%弱であった。さらにT地区では夕食の調理に過半数の家庭で1時間以上を費やし、調理することが「だいすき」との回答が三地区中で低値ではあるが最も高く、調理に多くの時間をかけて手づくり料理に力を入れているように見受けられる。調理することが「どちらともいえない、あまり好きではない」との回答が多かったO地区では調理時間も短い傾向にあった。

外食に関しては、図14に示すように三地区の差が明瞭にあらわれ、外食に出かける家庭はT地区で74.2%、C地区で63.1%、O地区では54.3%の値となり、都市部から農村になるにしたがい10%ずつ減少している傾向は注目に値する。外食をする理由としては家族の気分転換をあげている人が最も多く、次いで主婦の調理からの解放ないしはおいしいものを食べると続いている。

反面、外食をしない理由はO地区では食費を節約するためがあげられ、C・T地区では主人が自宅でご飯を食べるがあげられた。これは地域性ないしは母親の就業状況、家族構成等に規定される側面が大きいと考えられよう。すなわちサラリーマン家庭が多くなおかつ核家族が9割以上を占めるT地区では、母親は気分転換のため外食をしたいと考えており、また実際に家族で外食をしているが、一般的に主人は自宅でご飯を食事をしたいと考える傾向がうかがわれる。

次項目である既製食品については、外食と逆の傾向を示した。すなわち、既製食品を利用している家庭はO地区が78.1%、C地区が70.5%、T地区が60%程度という結果であった。既製食品を利用する理由として「便利だから」が主な事柄であり、一方利用しない理由としてO地区では「心がこもらない」があげられ、C・T地区では「食品添加物に不安」があげられている。O地区では心がこもらないから既製食品を利用したくないと思ながらも夕食の調理が短時間であったという結果と一致し、つい便利さゆえに利用している家庭が多いと推測される。

これは母親の就業者が多いこの地区では仕方ない結果といえるかもしれない。

健康食品に関して、「愛好している、時々ためす」についてはT地区で49.2%，C地区で45.9%，O地区では31.1%となり三地区ともに半数以下であった。健康食品をためす理由として「添加物の心配がないから、健康維持に効果がある」をあげている。反面、これらを用いない理由として「効果があると思えない」が主な事柄であった。特にO地区では健康食品に関して6割以上の人が否定的な回答をしていた。

次に食材料の栽培についてはO地区で73.5%，C地区で45.9%，T地区で20.1%と地域による較差が明瞭となった。O地区では地形柄、米は13.7%と少ないが野菜・果物等の栽培は75種類と多く、野菜はほとんど作っている家庭も6.8%あった。C地区については米は3.3%と低値であるが野菜・果物に関しては65種類と比較的多く栽培されている。T地区では野菜、果物の栽培も自分の庭を利用し簡単なものを多少栽培している家庭がみられる程度であった。

3) 献立と食内容

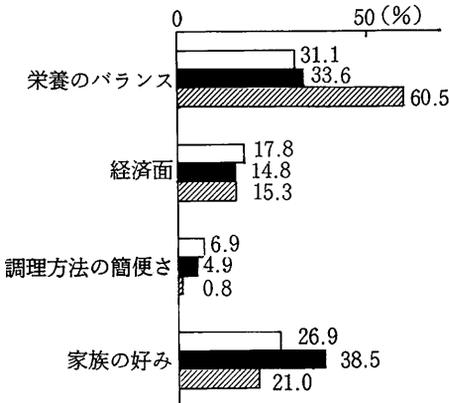


図15 献立を考える際に考慮される事柄

献立を考えるうえで考慮される事柄を図15に示す。O・T地区では「栄養のバランス」が最も考慮され、特にT地区の60.5%は群を抜いている。またC地区では「家族の好み」が1番に考慮されていた。2番目に考慮される事柄としてO・T地区では「家族の好み」が20%台で考慮されC地区では他の地区と逆に「栄養のバランス」となり、3番目には「経済性」と続いた。三地区ともに1、2番目に考慮されている「家族の好み」について特に誰

の好み優先されているかをみてみると三地区とも「子ども」との回答が35~40%と多く、次いで「夫の好み」の25~30%となり、「自分」については2.5~8.1%と低値であった。

食内容に関して、まず朝食については三地区ともに「ごはん・(みそ汁)・副菜1~2品」のパターンが23.4~41.1%と最も多く、次いでT地区の「パン・(スープ)・肉類」が23.4%となり、さらにC・T地区の「パン・(牛乳又はスープ)・副菜1~2品」が17%程度と続いた。朝食のごはん党を合計するとO・C地区が64%程度となり、多くの家庭で食され、T地区では33.9%であった。パン党は逆にT地区が46.7%と半数近くになり、C地区では24.5%、O地区では10.1%という結果を得た。

表4 夕食の食内容

	O	C	T
ごはん・(みそ汁)・副菜1~2品	12 (5.5)	2 (1.6)	4 (3.2)
ごはん・(みそ汁)・肉類	6 (2.7)	1 (0.8)	3 (2.4)
ごはん・(みそ汁)・魚介類	8 (3.7)	1 (0.8)	10 (8.1)
ごはん・(みそ汁)・肉類・野菜類	26 (11.9)	25 (20.5)	38 (30.6)
ごはん・(みそ汁)・魚介類・野菜類	25 (11.4)	18 (14.8)	39 (31.5)
パン・(牛乳またはスープ)・副菜1~2品	1 (0.5)	0	0
パン・(スープ)・肉類	0	1 (0.8)	0
パン・(スープ)・魚介類	0	0	0
パン・(スープ)・肉類・野菜類	0	0	4 (3.2)
パン・(スープ)・魚介類・野菜類	0	0	5 (4.0)
麺類	31 (14.2)	1 (0.8)	0
麺類・副菜1~2品	12 (5.5)	7 (5.8)	3 (2.4)
その他	74 (33.8)	55 (45.1)	10 (8.1)
無回答	24 (11.0)	11 (9.0)	8 (6.5)
計	219 (100.2)	122 (100.0)	124 (100.0)

次に夕食の食内容を表4に示す。ここで高い値を示したのはO・C地区の「その他」のパターンであり、33~45%となった。「その他」の食内容はうどんとチャーハンとかお好み焼にサラダ、カレーライスなどであった。

また、「ごはん・(みそ汁)・肉類・野菜類」と「ごはん・(みそ汁)・魚介類・野菜類」がほぼ同率の割合で高くなっており特にT地区ではこの二者の合計が62.1%と

なった。これは、献立で最も考慮される事柄が「栄養のバランス」である事と考え合わせると納得のいく結果である。主食について全体的には三食ともに、ごはん党であるが例外的にT地区の朝食はパン党が半数近くを占めた。またO地区では夕食に麺類、特にうどんを食している家庭が20%近くあった。これは、O地区における終戦前後の食生活調査の報告²⁾にもあるように朝・昼食は麦ごはんが食べられていたが夕食については主に水とん、おかゆ、うどんが食べられており、その食法が伝承されているものと思われる。主菜については全体的には魚介類に比べ肉類がやや多く、昼食に肉類ないしはその加工品が食べられており、特にC地区の55.7%は顕著であった。

以上食法についての結果から、料理については料理を愛好するタイプと義務感から料理を行うタイプに分かれ、その比率は拮抗していた。また既製食品等の利用については三地区ともに60~80%となり利便的食品志向の傾向がみられた。さらに、都市部になるにしたがい気分転換のため外食をしたり、健康志向のためか栄養面に対する配慮も特徴としてあげられた。

おわりに

「飽食の時代」といわれる現在は、あまりにも豊かで恵まれた環境の中で<食>に対して強い関心がよせられている。食品添加物、農薬の害が取りざたされ、自然食品、健康食品が売れ、テレビや雑誌では料理が多く登場し「一億総グルメの時代」ともいわれている一方、子どもの食事の様子が取り上げられ一人で食事をする子ども、非行少年の食内容などが問題となっている。家族揃って食卓を囲み、同じものを食べることにより精神的な絆は強まり、食作法の継承、人間関係の秩序を学ぶことができるが、一人で食べることは、このような効果も期待できず、好きなものばかり食べがちになり栄養のバランスが悪い食事になる。非行少年は満足な食事をせずに清涼飲料水を多飲し、スナック菓子を食事代りとしている。家庭での食事の重要性をもっと認識しなければならない。

今回の調査結果によると、現在の生活様式、居住形態は人々の生活に大きな影響を与えていることがわかる。高層住宅に核家族で住む人が多い高島平と、一戸建に大家族で住み「おひなげ」などの昔ながらの食文化を継承している小鹿野では食形態に様々な相違点がみられる。住構造の違いにより食事場所、食卓の種類、食事に要する時間、外食の機会、食内容などに地域差が認められる。

母親の食事に対する意識がその家庭の食生活を決定するともいえるが、調理が好きで、栄養のバランスも考え、手作りを心がけ、健康食品に関心を待つなど地域差はあまりない。

食文化の規定要因である「物質的要因」つまり食糧事情、生産様式は格一化され、「非物質的要因」としての「イエ」秩序は崩れ、大都市ほど「精神的要因としての共同体、「イエ」意識は薄れていく。表面の豊かさに惑わされずに現実の生活を見つめていかねばならない。

本調査研究を進めるにあたって、調査にご協力いただいた、小鹿野幼稚園、三田川幼稚園、秩父幼稚園、大東文化附属幼稚園、まるやま幼稚園の皆様から感謝いたします。また、本研究に御助言を賜った本学の山内昭道教授、茨木竹二助教授に感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 山内昭道、茨木竹二：子どもの食生活と躰についての総合的研究(1) 東京家政大学生生活科学研究報告第7集, 1984
- 2) 茨木竹二、川合貞子、千田真規子、猪俣美知子、斉藤尚子、武石仁美、野崎千穂子、福田啓子、村木由紀子：子どもの食生活と躰についての総合的研究(2) 東京家政大学生生活科学研究報告第8集, 1985
- 3) 川合貞子、千田真規子、猪俣美知子、上里千穂子、斉藤尚子、武石仁美、福田啓子、村木由紀子：子どもの食生活と躰についての総合的研究(3), (4), (5), (6), 東京家政大学生生活科学研究報告 第9集 1986